

だんだん、自分には
山暮らしが合っていると
気づいていったんです。

犬が好き、猫が好き

樋口さんの犬好きは有名で、犬が主役の小説もいくつか発表しているほどです。でももともとは猫が好きだったんだと聞いています。よく犬派と猫派に分かれると言いますが、樋口さんはどちらなんですか。

樋口 以前、杉並区の阿佐ヶ谷に住んでいたころは、小春という猫と暮らしていたんです。猫は人間ベッタリではないでしょう。その適度な距離感が好きだった。猫という生き物は人を自動エサやり機ぐらいにしか思って

ないようなところがあるけど、それでもいいやと。そばにいてくればかわいしいし、癒しの対象にもなるしという考えね。チャンドラーの『長いお別れ』を原案にした『ロング・グッドバイ』という映画があります。くたびれた探偵の主人公が猫と暮らしている。夜中にニャーニャー起こされたりしてさ。その探偵の姿に孤独さと悲哀、ペーソスがあって、とてもハードボイルドな感じがした。格好いいな、そんな暮らしもいと思うって友人からもらったのが小春でした。

『酔いどれ犬』（徳間文庫）は阿佐ヶ谷を舞台にしていますね。

樋口 ゲラを読み直してみると、主人公が猫を飼っているんですよ。別れた女房に押しつけられたという設定だった。犬を飼っているより猫を飼っている方が阿佐ヶ谷には似合う。

都会の孤独には猫が似合う。

樋口 そう。

田舎の孤独には犬が似合う。

樋口 うん。犬は生活の相棒だから、同じ目的に一緒に走っている。猫とはまったく違うペットなんだね。僕の場合、どちらかというともともと犬の方が合ってたん

だと思う。猫をまったく嫌いになった訳じゃないけどさ。

さつき、庭のビニールハウスに上ろうとした猫をすごい剣幕で追い払ってましたよね。

樋口 あれは実害があるから。よその猫にはそんなに興味はない。でも自分が飼った猫は徹底的に好きでしたよ。

『じゃりん子チエ』の小鉄とアントニオJr、独立独歩的な頭のいい賢者じゃないですか、あいつらは。プライドがあつて人間とほどほどつきあつて、たまにちょっと慰めにくてるような存在がよかった。でも結婚して子供を持つて家族意識が強くなったせいか。犬の方が相性が良くなった。今や犬なしではいられない人生になってしまいました。（笑）

そこには転換があつたんですか。

樋口 飽きっぽいわけではないけど、コロリと180度自分が変われるんだと思った。目線が反対を向いちゃったような感じかな。

犬の叱り方は子どもと同じ

犬は家族ですか？



樋口 うん。家族です。自分は犬にとっても親なんですよ。で、今いるココ、あいつは娘であり、その前に飼っていたダンは息子だった。教育して、一緒に育てて。そういう感覚があつたからね。犬に対する叱り方と子供達に対する叱り方は、まったく同じです。それは訓練を受けてよくわかった。

『里守り犬』の訓練のことですね。人も犬ともに影響は大きかったですか。

樋口 大きいですね。あれもあつて、自分の中の犬に対する関係が、ある意味では成就したんじゃないかとは思っています。

一般に、犬は飼われている家の中の人間の序列を決めていると言います。あれはどう思いますか。

樋口 うちは意識しません。でもココの場合は、あいつプライド高いし、多分僕と妻の次の3番目くらいの位置だと思ってるだろうな。うちの子供たちにマウンティングしてるしね。

ココはメスですけど。

樋口 マウンティングはメスでもやりますよ。うちの上